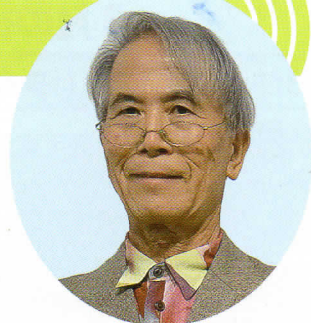


東海林太郎直立不動像・ 木彫原型制作を終えて

彫刻家 鎌田俊夫



この作品は、東海林太郎のある時期、ある瞬間の再現（コピー）ではなく、私という彫刻家個人の解釈とイメージに基づく私の表現です。ある人は「晩年の頃の姿を…」またある人は「若いデビュー当時の姿を…」と、一人ひとり異なるイメージを持っています。しかし作品は一つしか創れません。だから私は「これは私のイメージ、私のアイデアを形にした彫刻作品だ。彼の人生のある瞬間を切りとったものではなく、東海林太郎の73年間の全人生を彫ったのだ」と心の中で叫ぶのです。

私には東海林太郎像をつくる強い動機があります。その生き方への共感です。当時の早稲田商学部卒業、さらに研究科（今の大学院）修了、そして満鉄（調査課）就職…という超エリートコースを歩みながらも、軍部（関東軍）の圧力が徐々に職場にまで強まる中で、彼の考えや行動は受け入れられず孤立していきます。この間の葛藤、失望…先の見えない不安を抱えながら8年間勤務した満鉄を追われるように退職した彼に光と希望を与えたものが音楽であり歌でした。安全で約束された出世コースという一般的な生き方を捨て、危

険きわまりない自由と個性への道を選択したのです。そんな彼を最後まで献身的に励まし支えたのが静夫人その人でした。こうした彼の生き方を知れば知るほど私の東海林太郎への愛着と敬慕の気持ちは深まり、制作意欲は高まりました。

さきがけ紙上に「制作者募集」を発見した私は躊躇なく応募しました。そして私が選ばれました（2019年8月下旬）。さっそく材料（岩手産赤松）を確保し、デッサンをくり返し、工具を点検整備あるいは更新しました。チェーン・ソー、オノ、ノミ…あらゆる道具をつかい心をこめて取り組みました。粗彫りは一気に進むのですが、その後が大変でした。久しぶりの着衣の像でしかもボタンが20個もあるのです…「よし、出来た、やめよう」と思って翌日見ると変なところが見つかる…その連続でした。そんな状態が2020年6月末まで続きました。

のろけ話になりますが、一番手ごわい観察者・批評家は女房でした。クラシック・バレエに夢中なこの人は彫刻はつくれないけれども人体構造は私より（？）知っているのです。憎いけれども感謝しています。困ったことが一つだけありました。グラビア写真を頼りにデッサンし彫り進めたのですが、メガネなしの素顔、それに後ろ向きの写真が一枚もないのです。この一点からも、やはり創造は想像の産物でした。

やがてこの木彫原型は鋳造工場に運ばれブロンズ像として生まれ変わります。そして2021年の早春、旧県立美術館横の野外空間、千秋公園を背景に、広小路方面を望む位置に「東海林太郎直立不動像」モニュメントとして設置される予定です。もちろん、その時はメガネをかけています。

この像が多くの人々に末永く愛されることを願っています。

2020年6月

日本美術家連盟会員

二紀会 秋田支部長

秋田国際美術家協会 会長

彫刻家 鎌田 俊夫



完成した木彫原型